「実りと成長」③御霊の実（誠実、柔和、自制）　ガラテヤ 5:22-26

「御霊の実」について学んでいます。御霊の実は九つあり、最初の三つ、「愛、喜び、平安」は私たちと神様との関係における実、次の三つ、「寛容、親切、善意」は私たちと他の人との関係における実、そして、最後の三つ、「誠実、柔和、自制」は、私たち自身に関する実です。今日は、最後の私たち自身に関する三つの実、「誠実、柔和、自制」について学び、こうした御霊の実を結ぶ秘訣を、聖書の中からご一緒に学んでみたいと思います。

１．誠実、柔和、自制の実

御霊の実の第七番目「誠実」という言葉は、ギリシャ語で「ピスティス」と言います。「ピスティス」という言葉は、聖書では「信仰」とも訳されています。この箇所の、「ピィスティス」は「信頼して大丈夫なこと」という意味になります。また「ピスティス」には「信仰」、「誠実」という意味の他に「真実」という意味もあります。ですから、「信頼に足る人間」になるということは、「真実な人」になるということになります。能力のある人には、確かに多くの人が注目するでしょう。また、気前のいい人のまわりには多くの人が集まってくるでしょう。けれども、本当の意味で信頼されるのは、裏表のない真実な人、まっすぐな人です。真実というのは、その心や生き方に偽りがないということですからいつも神様の前に正直に立ち続ける人とも言えます。神様の前ではごまかしが効かないので、自分の心や生活を正直に見つめ、罪や誤りがあればそれを心から認め、悔い改めていくことになります。神様は私たちの心の中に真実を求められますが、人々もまた、真実な神様を信じる者たちに、それにふさわしい真実を求めていると思います。神様の前に真実な生き方をすることによって人々の信頼を勝ち取ることのできる「誠実」という実を豊かに結びたく思います。

第八番目の実、「柔和」は、決して、物腰が柔らかいというだけのことではありません。それは、神様の前に心からへりくだる謙遜さを意味しています。被造物である私たちが創造者であるお方の前にひれふすこと、また、罪を持った私たちが、聖なるお方の前におののくことです。そして、そのような心で神様の前に立つ人はまた、他の人に対しても、謙遜でいられるのです。神様を知らなかった時には、偉大な神様の前に、人間はみな等しい存在だということが心底分かっていなくて、どこかで、誰か他の人と比較して、自分は優れている、自分は劣っていると考えながら生きてきたのではないでしょうか。神様は、私たちに単なる物腰の柔らかさ、人当りの良さやうわべだけの柔和さではなく、内面の「柔和さ」を求めておられます。ペテロの手紙第一 3:4 に「むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神様の御前に価値あるものです。」とあります。ですから本当の柔和は、御霊の実として与えられるのでなければ、自分の心がけでは決して得ることのできないものなのです。しかし、柔和という御霊の実を持つ人には、主イエスが「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」（マタイ 5:5）と約束されたように、神様が与えようとしておられる大きな祝福を受けることができるのです。

第九番目の実、「自制」は現代の私たちに、一番欠けているものかもしれません。このごろは、すぐ「切れて」しまって、暴力をふるったり、人を殺してしまったりするニュースを聞きます。そこまでひどくなくても、切れてしまって今まで持っていた人間関係を一瞬にしてダメにしてしまうこともあります。それまで、どんなに人に対して寛容で、親切で、善意があり、誠実であり、柔和であったとしても、自制心を失った瞬間に、それらすべてのものが台無しになってしまうことがあるのです。ですから、使徒パウロは、スポーツの選手のことをたとえに引いてこう言っています。「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は決勝点

がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」コリント第一 9:24-27　パウロは御霊の実である「自制」を大切なものとし、それを求め、それをしっかりと身につけようと努力していました。御霊の実ですから自分の中から産まれてくるものではないことぐらいパウロは分かっています。しかし「自制」という御霊の実を少しでも受けやすい状態にすることはこちら側で出来ることです。実が来るかどうかは分かりませんがふさわしい準備というものがあると思います。パウロでさえ、それを真剣に求めていたなら、まして私たちは、もっと「自制」を求める必要があるのではないでしょうか。

２.実を結ぶ秘訣

しかし、このように、御霊の実について、くわしく学べば、学ぶほど、それを身につけることが、どんなに難しいかが分かってきます。どうしたら、本物の御霊の実を実らせることができるのでしょうか。それは、私たちのうちに、神様のいのちが働くことによってです。切り取ってきた木は、いくら待っても、実を結ぶどころか、どんどん枯れていくだけです。しかし、地面に植えられた木は、しっかりと根をおろし、太陽の光を受けているかぎり、かならず実を結ぶ時がやってきます。私たちも、キリストに根ざし、神様の恵みを受ける時、実を実のらせることができるのです。

しかし、聖書は、私たちが神様のいのちによって生かされる前に、まず、死ぬ必要があると教えています。「生かされるために死ぬ」とは、どういうことかと言いますと、「古い私」が死ぬことを言います。これは「自我の死」とか、「肉の死」とか言われます。私たちは、知らず知らずのうちに、「自分の考え」「自分の知識」「自分の判断」「自分の好み」「自分の願い」など、「自分」を主張し、神様に対してさえ、「我」を押し通そうとします。この古い私をなんとかしない限り、どんなに良い実の種であっても、茨の中に蒔かれた種のように、茨の勢いに負けて、実を結ぶことができなくなってしまいます。古い私が死に、私たちの罪深い性質がどこかで処分されなければなりません。古い私はどこで死に、私たちの罪深い性質はどこで処分されるのでしょうか。それは、イエス・キリストの十字架の上でです。24 節に「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」と書いてあるとおりです。クリスチャンであれば、誰もが、イエス・キリストが十字架の上で死なれたのは、私の罪のためだったということを知っています。キリストは、私たちが受けなければならなかった罪の刑罰を代わって受けて十字架で死なれたということを信じています。しかし、残念なことに、多くのクリスチャンが、あの十字架で、古い私も、私の罪深い性質も一緒に死んだことを知らないでいるのです。聖書にそう書いてあっても、信仰によってそれを自分のものとしていないのです。

私たちは、イエス・キリストが十字架にかかってくださることによって罪を赦されました。すでに罪の刑罰から救われています。サタンも私たちの罪を責めることはできません。しかし、私たちはまだ罪の力が支配しているこの世に生きています。クリスチャンであっても、罪を犯すことがあります。ある人が罪についてこんな風に言いました。「キリストを信じる前は、私が罪を追いかけていましたが、クリスチャンになると罪が私を追いかけてくるのです。」と。つまり神様を知らない時には行動の基準は自分自身の価値観ですから何もしなくても悪い方向に行く可能性が強いのです。そのことがヤコブ 1:14 で「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです」と言われています。しかしクリスチャンになるとどうなるでしょうか？自ら罪を追いかけるということは無くなりました。神様を知って人生の方向が１８０度変わったのです。しかし今度はサタンが私を引きずり下ろし、神様から引き離そうと狙っているのです。罪の究極的な目的は私たちを神様から引き離し、永遠の滅びへと私たちを追いやることです。つまり罪が追いかけてくるのです。パウロはこのことで悩み苦しみました。神に少し喜ばれるよう

なことをした途端、己惚れる思い、他人を見下したり、批判したりする思いが出てくるのです。パウロは「ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」ローマ 7:25 と言いました。このことからパウロは私達は罪と戦うのではなく、罪に勝利されたキリストにつながることが最も重要なことだと言いました。

私たちがキリストとともに死に、キリストとともに生きることについて、ガラテヤ人への手紙は 2:20 でこう言っています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神様の御子を信じる信仰によっているのです。」これはまさに「信仰の奥義」のようなことばです。私たちはキリストの十字架によって罪に死に、キリストの復活により、聖霊により生かされました。ですから、私たちはキリストを信じる信仰によって生き、聖霊に導かれて歩むのです。その時、私たちは、聖霊が私たちのうちにその実を結んでくださるのを見、体験することになるでしょう。ガラテヤ人への手紙は、御霊の実について教えた後、「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることのないようにしましょう。」（25、26 節）と結んでいます。虚栄に走るとは人から良い信仰者として見られるように体裁を整えるということです。互いにいどみあったり、そねみ合ったりということですから他人のことが気になる人も虚栄に走っているということです。神様は私達信仰者に御霊の実を豊かに実らせようとしています。十字架の贖いと復活のいのちの主イエス・キリストにしっかりとつながり日ごとの生活の中に「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」という御霊の実を結んでいきましょう。